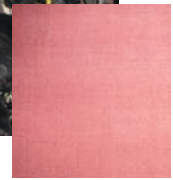




— 植物と染め —



駒城 素子 (生活科学部教授)

お茶大構内には華やかな桜の木は少ないのですが、銀杏をはじめとして楓、梅、椿、山茶花、車輪梅、枇杷などの木々が、ヨモギなどの雑草とともに、都心の中でしばし自然を味わえる空間を作っています。

桜の優雅な色はもちろん、バラやチューリップなど色とりどりに咲く美しい花を見ると、あるいは晩秋の鮮やかなもみじをみると、この色を衣服に移して身に着けることができたらさぞ心楽しいことであろう、と思うのは筆者だけではないと思います。しかし、花びらなどからそのままの色に染められるものはあまりありません。古代から染料として使われてきた植物のほとんどは、通常では想像できないような、思わぬ色を染め出すということの方が多いのです。しかも花びらよりむしろ葉や枝、幹に色素が含まれていて昔の人は上手に利用してきました。ただ植物色素の多くは直接に繊維に染着する力は弱く、媒染という技法をとります。これが合成染料の使いやすさに慣れた者にとっては少々厄介で、場合によってはむら染めになりやすいなど染色法が難しい染料(茜や紫根)もあります。しかし媒染剤によってしっかり染めた色は、洗濯しても色が落ちず丈夫な染色物になります。いわば自然を身につけることができます。

染料植物は医薬としても効果をもつものが多く、古くから紫根、紅花、鬱金、黄檗などが利用されてきました。私の研究室では、染料としてではなく中薬(いわゆる漢方薬)として使用される枇杷の葉を使って染色してみました。枇杷葉は深緑色をしています。水やアルコールで抽出した色は全く違う色相をしています。どんな色と思いますか?大変美しいワインレッドです。媒染剤も使わずにウールを優しい赤色に染めます。しかもこれは洗濯しても丈夫です。

この染色材料の枇杷葉はお茶大構内で調達しました。構内には数本あります。1本は生活科学部本館の正面に向かって左手の入り口にあり、初夏になるとたくさん実をつけます。学生時代、人梯子を組んで実をとったというおてんばOGもいるようです。この冬の時期はいっぱい花が咲いています。

また、保健管理センターに続いた高台、ここはかつて高い煙突のそばえた焼却炉に面して、崖になっていました。そこに大きな枇杷の木がありました。わんぱく小学生時代にこの崖を走り回った附属のOBもいることでしょう。

木はそこに過ごした人達の思いを担って時を刻んでゆきます。私達は自然に活かされています。構内の植物はできるだけ残したいものです。